

撤退田園

いなだそういちろう

稻田宗一郎

突然、惣右衛門の険しい声が聞こえた。

「国は、農協や農地法の見直しで、何とか農地を法人に集めたいと考えているようだが、おそらくそれは難しい。特に平場の地力が良い田園は地域内の担い手が借りることになる。機構に貸し出される農地は、借り手がつかない条件が悪い土地が多くなるさ。これはコメを作っている百姓の常識さ」

惣右衛門はかなり酔いながら、

「大体、百姓は国ため、人のためになんて考える人種じゃないよ。耕作をやめて補助金がもらえるなら、さっき茂が言ったように捨てつくりの農地を機構に貸し出し、補助金をもらうってことになるのさ。百姓だってバカじゃないよ。良い田園、作り易い田園は自分でわかっているんだ。だから、良い田んぼには無理してでも自分がコメを植えるさ、人に貸し出す田園なんてろくでもない田園さ。大体、田園と一口に言って

も、同じ肥料を同じ量撒いたって、田圃が違えば、いや、風向きや取水口が違えば、収量や食味が違うのがあたり前さ。女と同じさ」と続けた。

「女と同じ？ 惣右衛門さんはそっちの道も篤農家で、しっかり耕したのか」

茂は冷やかし半分で言った。

「女は別さ、田圃みたいには上手くいかないさ。俺のかかあを見ろよ」惣右衛門は照れ隠しに笑い、

「ところで」

と話題を農協に変えながら、

「農協はさっきお前が言っていたように相変わらずだな。職員も役員も、都会のサラリーマンと同じで、クビになり失業するのが怖いもんだから、組合員や地域を見ないで、上司の顔色を見て、リスクがある新しいやり方にはチャレンジせず、昔のやり方しかしないからな」

と続けた。

「そうだよ。農協がそんな考えだから農業はダメなんだ」

茂も頷いた。

「確かに、農協には皆が言うような体質はあるな。この前の役員改選でも改革派の和田専務が足を引張られ再選されずにクビになり、保守派の運動論の内野常務が専務昇格だったしな。俺だって、先はわからなさ。クビになったら、賢一、俺を雇ってくれよ」

功は笑いながら賢一を見た。

「そん時は幼馴染の特権で雇ってやるか」

賢一は軽く答えた。

「そうか、賢一、頼むよ」

「俺は、今、西川を中心に40ha やっているが、将来は機構を使って100ha、200ha と規模を拡大するつもりだ。そうなると、吉島や西川の

土地だけでは無理だ。お前らがどう思おうと、俺は、今回の事業を積極的に利用し、地域を超え、場合によっては他県にまで農地を借り、規模拡大をするつもりだ」

「賢一の考えは、まさに今の政策にピッタリだな。そうなりや、俺も少しは癪だけど、お前の法人を評価しなければな」

「当たり前だ、前にも言ったけど、今の農業で競争力につけるには、規模拡大、これっかないよ」

「そうかも知れんな。賢一は賢一のやり方で頑張れよ」

茂は賢一にこのように言ったものの、茂自身は、賢一とは全く違った考えだった。茂はコメ専業で規模拡大したとしても、米価が10,000円を割り込み、8,000円程度になれば、経営はなりたたないと考えていた。100ha、200haも経営するとなれば、人を雇い人件費を払わなければならぬ。人件費を150万程度の低賃金に抑えられれば経営としては可能性はあるが、そんな安い賃金では若い人は働くはずがないと考えていた。

さらに、水の管理とか畦管理などの日常の管理は誰がやるのか、コメ作り特有の問題もあった。

茂の家も、賢一ほどには古くはないが、それでも茂で七代目であった。茂は、コメと麦の専業で農地を集積し、大規模稲作経営を実現できても、TPPで外国から安いコメが入り、米価が大幅に下落すれば、100ha程度の経営は一たまりもないと考えていた。

茂のコメ作りの師匠は惣右衛門だった。惣右衛門は5haの田圃でコメを作っているが、5haのうち、犬川沿いの2haの田圃で生産する「姫こまち」は「惣右衛門のコメ」のブランドで高く売っていた。

惣右衛門のコメ作りの哲学はいたってシンプルであった。

……俺はコメのことしか知らん。世の中の流れが変わり、流行が変化しているなんて知らん。確かに俺のコメは高く売れている。しかし、俺

はコメを高く売ることを目的としたコメ作りをしたことは一度もない。俺は、ただ、親から教えられ、怒られながら、高校を出てから、ただ、ひたすらコメを作ってきただけだ。飯をくうために、家族を養うために俺にはコメ作りしかなかった。俺は特別すばらしいことをやってきた訳ではない。俺のコメが高く売れるのは俺が仕組んだわけではない。俺は、ただコメ作りが好きだけで、美味しいコメ、嘘のないコメを作りたかっただけだ。俺は自分の好きなことをやってきただけだ。世の中の評価なんて関係がない。

良く考えてみろ、世間の評判ばかり気にしていたら、周りの人間に媚びを売り、自分を売り込むだけの品のない人間に成り下がるだけだ。俺はそんな人生なんてごめんだ。俺が育てるコメだって同じだ、育てた俺が品のない人間なら、育ったコメにも品格はないんだ。俺がコメに対して、お前を高く売ってやると思った瞬間、そのコメは俺にソッポを向くんだ。コメが高く売れるとか、人気がでるとかは作っている俺からみればまったく関係がないことなんだ。

つまりな、人間なんてやつは、自分が世の中で認められれば、成功した人生ってことらしいが、そんな考えは俺にはこれっぽちもない。そんな世の中の評価なんてくそくらえだ。一番重要なことは、自分は自分でしかありえないってことを真摯に受け入れることなんだ……

茂は、この「惣右衛門のコメ」を地域に広めようとしていた。

具体的には、惣右衛門の「職人技術・肥培管理技術」を「IT技術」を活用して圃場毎に管理することを、地域の担い手農家に普及しようと考えていたのである。功も昌二も茂の考えに賛同し、農協青年部の担い手を中心に、古い農協体质の役員たちと戦っていたのである。

——この話は賢一には言っていた。

「茂、お前はいつも悲観的に物事を考える癖がある、それは、お前の考えが古く、お前がアホだからだ」

賢一は、酒の勢いに任せ挑発的に言ってきた。

「俺の考えが古い。どこがアホなんだ？」

茂は、机をドンと叩きながらくってかかった。

「お前が古いのは、今の主流である市場原理、新自由主義を全く理解していない上に、日本を中心に農業を考えていることだ」

「日本を中心に農業を考えて何が悪い？」

「茂、良く聞けよ、今は、ヒト、モノ、カネの自由化が人類の幸福につながるんだよ。近い将来、日本は、確実に、外国から安い農業労働力を入れる政策をとる。そうなれば、相対的に安い賃金で農業経営ができるようになる」

賢一は茂を見下ろすように言った。二人の間に微妙な沈黙が流れた。

「…………」

すると、今まで静かに聞いていた惣右衛門が、茂と賢一の議論に口をはさんだ。

「賢一、俺はそうは思わん。人間が住んでいる社会は理屈通りには動かないんだ。コメ作りだってそうだ。米価が下がっても、爺さんたちはコメを作っているじゃないか。賢一に土地を貸してくれた村越や牧野のじっちゃんは、病気で体が動かなくなったから賢一に貸したんだ。大部分のじっちゃん達は、東京に住む息子や孫や親せきにコメを送ってやるために、体が動く限りコメを作っているんだ。「あらふね」のコメ農家は、コメに妙な愛着をもっているんだ。奴らのコメ作りは理屈じゃないんだよ」

「確かに惣右衛門さんの言うように、今の親父たちの代はそのとおりだよ。でもな、次の世代はどうなんだ。やつらは明らかに土地に対する愛着も親の代に比べて薄いし、コメ作りについてもほとんど知らん。こ

ういう連中は、農協も利用しないし、近い将来農地を貸出しあるだ。こんな状況でどんな農業ビジョンがあると言うんだ。農地を集積し、規模拡大しかないじゃないか？」

賢一は声を荒らげた。

「要するに、賢一は、古い奴らは黙って農業から去り、黙って土地を貸せって言いたいんだな」

今度は、茂が力んで言った。

「まあな、単純に言えばその通りさ。経営能力がある人間がコメを大規模に作り、老人や後継者がいない農家は、グズグズ言わずに、俺みたいな法人に農地を貸せばいいんだ。惣右衛門さんだって、息子の惣次郎は後を継がず、東京に就職してしまったじゃないか。惣次郎は西川には戻ってこないさ。そうなりや、惣右衛門さんの家は終わりだし、田んぼを貸すしかないんじゃないか」

賢一は酔った勢いで言い放った。

不意に茂が立ち上がり賢一に向かって指をさし、

「賢一、それは、言い過ぎだぞ。惣右衛門さんに謝れ！」

と叫んだ。

テーブルを挟んだ賢一と茂の空間だけが切り離され、黄色いライトの中に浮かんでいた。

「……………」

惣右衛門は手でマアマアと言う形を作り、賢一と茂をなだめるように静かに言った。

「茂、まあ、いいから、いいから。賢一くらいの元気がないと、西川のコメもダメかもな」

つづく